



Title	α 1-Antichymotrypsin as a Risk Modifier for Late Onset Alzheimer's Disease in Japanese Apolipoprotein E ε 4 Allele Carriers
Author(s)	吉岩, あおい
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40897
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	よし 岩 あおい
博士の専攻分野の名称	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	第 13509 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 10 年 1 月 7 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 论 文 名	α 1-Antichymotrypsin as a Risk Modifier for Late Onset Alzheimer's Disease in Japanese Apolipoprotein E ϵ 4 Allele Carriers (日本人のアポリポ蛋白 E の ϵ 4 対立遺伝子の保持者にとって、 α 1 アンチキモトリプシンは晚期発症型アルツハイマー病発症の修飾危険因子となる)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 荻原 俊男 (副査) 教 授 武田 雅俊 教 授 網野 信行

論 文 内 容 の 要 旨

【目的】

アルツハイマー病(以下、AD)の発症には、遺伝因子と環境因子が複雑に関与している。早期発症型家族性 AD は、単一遺伝子の変異によって発症するが、晚期発症型家族性 AD や孤発性 AD の発症には、複数の遺伝子の変異が関与していると考えられる。最近、白人の AD 患者において、 α 1-アンチキモトリプシン(以下、ACT)遺伝子と AD 発症との関連が報告された。今回、日本人の晚期発症型孤発性 AD の発症とアポリポ蛋白 E(以下、APOE)，及び ACT との関連について検討した。

【方法】

AD 患者は、NINCDS-ADRDA (National Institute of Neurological and Communicative Disorders and Stroke-Alzheimer's Disease and Related Disorders Association) が作成した診断基準によって診断した。発症年齢が 65 歳以上の probable 晚期発症型 AD (以下、LOAD) 139 例(平均発症年齢 74.2 ± 7.1 歳, 65-94 歳) と、年齢を一致させた健常対照群 250 例(平均年齢 79.8 ± 7.9 歳, 65-101 歳) を対象とした。末梢血白血球より抽出した高分子量 DNA を用い、PCR により特定の遺伝子領域を增幅し、制限酵素による消化で多型を検出した。APOE の PCR 産物を制限酵素 HhaI で消化し、出現したバンドのパターンを解析することにより、ACT の PCR 産物を制限酵素 BstNI により消化し、遺伝子型を決定した。得られた結果に関しては、APOE と ACT の対立遺伝子頻度を患者群と対照群を比較検討した。さらに、APOE4 を保持するか否かで患者群と対照群を分け、ACT 対立遺伝子頻度を両群で比較した。統計学的計算は χ^2 検定を用いた。

【成績】

1) APOE の遺伝子型

解析した APOE の遺伝子型の頻度(%) は、LOAD 群と対照群の順に、 ϵ 2/ ϵ 2 (0.0; 0.4), ϵ 2/ ϵ 3 (5.0; 11.6), ϵ 2/ ϵ 4 (0.7; 1.6), ϵ 3/ ϵ 3 (43.2; 76.4), ϵ 3/ ϵ 4 (43.9; 8.0), ϵ 4/ ϵ 4 (7.2; 2.0) であり、対立遺伝子 ϵ 4 の頻度(%) は、19.5; 6.8($p < 1.0 \times 10^{-10}$) となった。この結果は、これまでの報告と一致した。いわゆる多因子疾患の case-control

study で、地域を変えても、このように強い相関を認めた遺伝子多型は、これまで報告されていない。したがって、対立遺伝子 ϵ 4 は、発症の強い危険因子と考えられた。

2) ACT の遺伝子多型

ACT の遺伝子多型は、ACT 蛋白のシグナルペプチド領域にあり、Ala (A) -Thr (T) の塩基置換を伴う遺伝子多型である。PCR 産物を BstNI により消化すると、対立遺伝子 A は 84bp と 33bp に、対立遺伝子 T は 117bp のバンドが出現する。白人では、対照群の対立遺伝子 A の頻度は、50.8% であると報告されている (Kamboh et al, Nature Genet. 10: 486-488, 1995)。今回の日本人を対象とした解析の結果では、対照群の対立遺伝子 A の頻度は 36.8% であり、白人に比し対立遺伝子 A の頻度が、有意に低かった ($p < 0.001$)。この傾向は、LOAD 群でも認められた。

LOAD 群と対照群では、対立遺伝子 A の遺伝子頻度(%)は 48.6 ; 36.8 ($p = 0.001$) であり、有意差を認めた。APOE4 (= 対立遺伝子 ϵ 4) をもつものの対立遺伝子 A の頻度は (52.8 ; 17.2%, $p < 1.0 \times 10^{-5}$)、APOE4 を有さないもの (44.0 ; 39.4%, n.s.) であった。そこで odds 比 (相対リスク) を比較すると、ACT-A(+) / APOE4(+) と ACT(-) / APOE4(-) で、それぞれ 21.1 (99% CI 7.2-62.1, $p < 1.0 \times 10^{-10}$), 3.2 (99% CI 1.1-9.3, $p = 0.004$) であり、APOE4 有する者のうち、対立遺伝子 A を有するものは、有さない者に比し、odds 比が 6 倍以上上昇した。

脳脊髄液中の ACT は、炎症や悪性腫瘍により上昇するが、年齢により左右されない点で AD の生物学的診断マーカーとして注目されてきた。また、ACT は、APOE と同様、老人斑を構成する蛋白である。ACT が、APOE と相互作用をして、AD の発症に大きく関与している可能性が大であると考えられた。

【総括】

日本人の孤発性 LOAD では、APOE の対立遺伝子 ϵ 4 が発症の危険因子であることを再確認したが、ACT-対立遺伝子 A が、APOE との相互作用により発症に寄与していることが示唆された。

論文審査の結果の要旨

本研究は、アルツハイマー病の発症と遺伝的危険因子を探索することを目的として、アポリポ蛋白 E (APOE)，および α 1-アンチキモトリプシン (ACT) との遺伝子多型を用いて、健常人と晩期発症型孤発性アルツハイマー病 (LOAD) 患者群間の遺伝子型/対立遺伝子頻度を比較するケース・コントロールスタディを行い、両遺伝子の関連の有無を検討した。

APOE 遺伝子の多型では ϵ 4 が、ACT のシグナルペプチド領域のアラニン (A) からスレオニン (T) の塩基置換を伴う多型では対立遺伝子 A の頻度が LOAD において高く、有意差を認めた。ACT-A と APOE- ϵ 4 対立遺伝子のオッズ比は、対立遺伝子 A と ϵ 4 の両者をもつものでは 21.1 となり、 ϵ 4 をもつもののうち、対立遺伝子 A をもつものではもたないものに比し、オッズ比が 6 倍以上、上昇した。

ACT は、LOAD の血中・髄液中で増加しており、セリンプロテアーゼ阻害作用を有する急性期蛋白であるが、 β アミロイドと凝集物を形成し老人斑への沈着を促進していることが、免疫組織化学的に証明されている。ACT そのものの働きは、蛋白分解酵素の働きを抑制するために、APP から、 β アミロイドの生成の際のプロセッシングの異常を引き起こし、APOE とともに、 β アミロイドの蓄積を促進し、老人斑を形成すると考えられる。

以上より、日本人の LOAD では、APOE の対立遺伝子 ϵ 4 が、発症の危険因子であることを確認し、ACT の対立遺伝子 A が、APOE との相互作用により発症に寄与していることを示唆し、今後の AD 発症原因の探究に向けひとつの視点を提示したものである。よって、本研究は学位の授与に値すると考える。